

注釈「門田橋遺跡発掘調査概要報告」 －山本清考古資料・鳥取県湯梨浜町分より－

村上 勇

はじめに

この小文の第一の目的は、昭和47（1972）年12月22日から翌48（1973）年1月6日にかけて、鳥取県東伯郡東郷町大字門田字南768の7において、県道長和田羽合線改修工事中に確認された門田橋遺跡を緊急発掘調査した、当時鳥取県文化財保護委員会委員を務めていた、島根大学名誉教授山本清がまとめた調査の概要報告を紹介することである。調査から年月が経過したが、山本から発表の依頼を受けた村上が報文に注釈をつけ、責務の一端を果たそうとするものである⁽¹⁾。

山本の報告は、一 緒言、二 所在、三 調査に至った経緯、四 調査の範囲と区分、五 調査の経過、六 遺跡、七 遺物、八 結語の7頁から成っており、続いて、図2頁、図版1～17が収録されている。ここでは、まず章ごとの山本の報告文を掲載し、それぞれについて注釈【】をつけるという方法を取ることとし、図版については必要な範囲で取り込んだ⁽²⁾。

「門田橋遺跡発掘調査概要報告」 発掘担当者 山本 清

「一 緒言」

県道長和田羽合線改修工事に関する門田橋建設工事中発見された同所における貝塚をともなう遺跡の発掘調査を担当実施したので、その概要を報告する。出土遺物その他の資料は、なお整理中であるので、ここではとりあえずこれまでに判明した内容を要約して報告した次第である。

【注釈】

当時の東郷町教育委員会の高塚教育長は、文書の中で門田貝塚と云っているが、担当者の山本は門田橋遺跡としている。山陰では、遺跡の一部に貝層が堆積している状態の遺跡に、時代は前後するが、鳥取県では、北条町の島遺跡（縄文）、青谷町の青谷上寺地遺跡（弥生）等に貝層があるが、規模は小さい。島根県では、出雲平野に弥生時代の貝塚が多いが、奈良時代以降となると、大社町の中分貝塚など、4遺跡に過ぎず、中でも神戸の水海に面した上長浜貝塚は奈良時代から中世初期に営まれた最大のものであり、それらは、河川により形成された砂丘上や潟湖近くの低湿地で確認されている⁽³⁾。

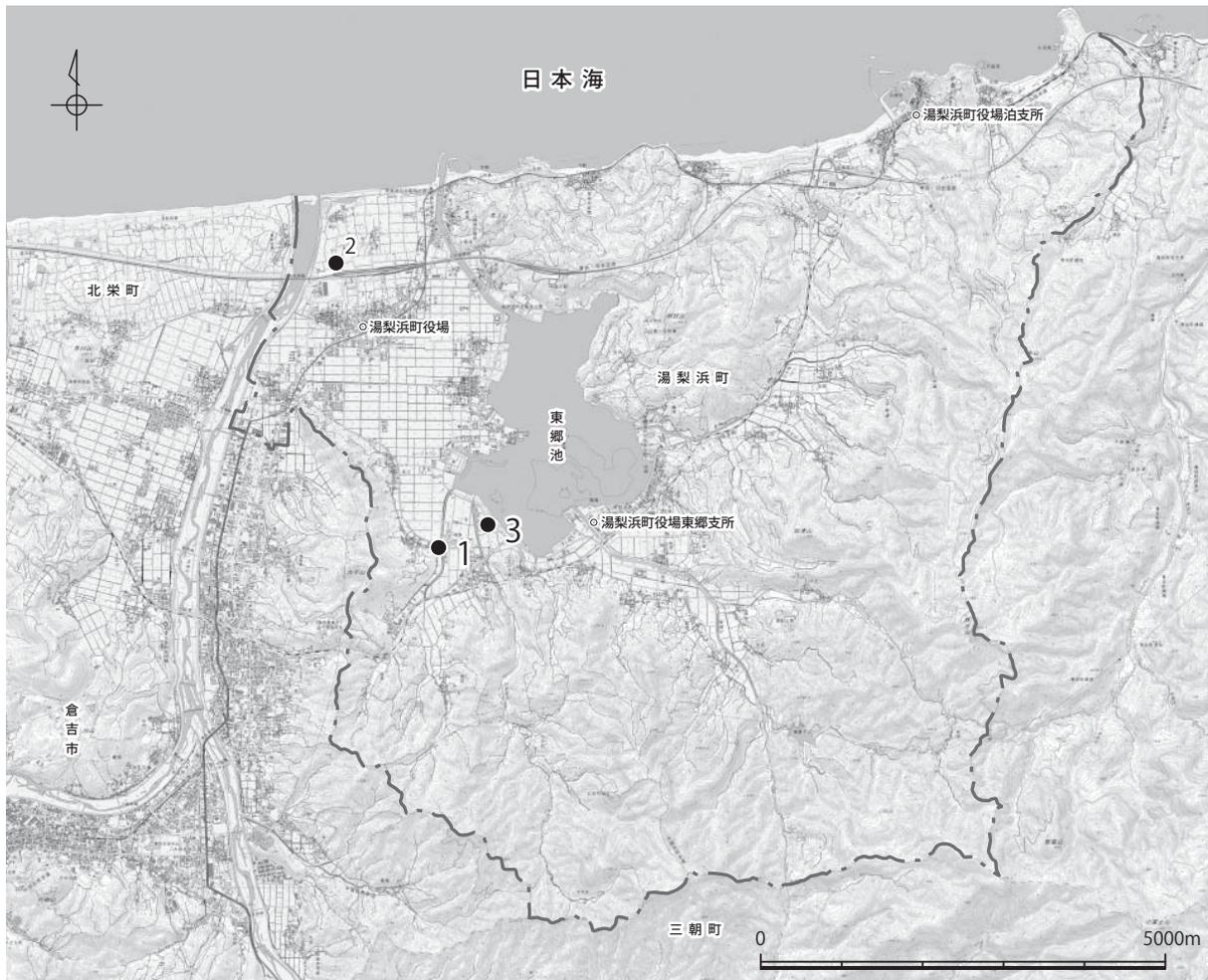
「二 所在」

所在は、鳥取県東伯郡東郷町大字門田字南七六八の七である。同所は東郷池を中心とする盆地様の地形の西南部にあたり、西側につらなる丘陵の麓から一〇〇メートルばかり東方の沖積地で、南方埴見（はなみ）部落方面から北流して東郷池に注ぐ小川＝埴見川の西岸にあり、東郷池まで約八〇〇メートルの所である。

【注釈】

遺跡は、平成16（2002）年の市町村合併により、現在は湯梨浜町に属している。

この遺跡の所在地は、鎌倉時代に行われた下地中分を示す絵図の例として有名な「伯耆国河村郡東郷庄之図」（正嘉2・1258年の裏書あり）に記されている地域に入るものである。遺跡の示す年代によっては、図中の建物



1. 門田橋遺跡 2. 長瀬高浜遺跡 3. 北山1号墳

第1図 門田橋遺跡位置図

(小屋・家屋)の生業の有り様をも知ることができる可能性を持った貴重な事例になることは、報告の結語を見れば、調査担当者が当初より当然意識していた事がわかる⁽⁴⁾。また、山本が、遺物が中世に属するものとして整理していたことも、参考にした報告書類によっても知られる⁽⁵⁾。

なお、東郷湖とその周辺の景観は、遺跡の営まれた当時と現在では大きな変化が認められようが、結語の注釈部分で指摘するように、この遺跡の盛期が13世紀だとすると、「東郷庄之図」に描かれている建物(小屋・家屋)などを取り巻く環境は、まさにこの遺跡が営まれていた当時のものであり、絵図と遺跡との間で、直接的な検討を許される関係性を有していることになる。

門田橋遺跡の辺りは、藁屋根と掘立柱の在家の集まりが描かれていて、背後に丘陵地が展開し、前面に東郷池が広がっている(東京大学出版会2024)。世界の気候変動を研究したフェアブリッジの海水面変動曲線(磯貝2002)を援用すると、13世紀から低下を続けた海水面は15世紀中頃に最大低下2メートルを迎え(パリア海退)、その後17世紀初頭にかけて上昇(中世海進)しているので、絵図に描かれて以降、湖水面は低下し、周辺部の陸化が進行することになる。遺跡が東郷池縁辺部に位置しており、後述するように土錘の出土などもあって、その性格を漁労生活と結びつけ易いのであるが、近くに大型前期古墳である北山1号墳があり、それを支えた生産力や、埴見川の形成した小平野の存在や、門田の地名は地頭が営農した直営田に多いことや、遺跡から銅銭の出土が無視できない量で出土していることなどもあり、山陰沿岸の潟湖を利用した交通の問題などを意識すると、遺跡の性格付けには検討を要することも多いと言わざるを得ない。



写真 1 - (1) 調査地点



写真 1 - (2) 発掘調査風景

「三 調査に至った経緯」

ここが遺跡であることは、昭和四七年の秋、県道の架橋工事で、貝層断面があらわれて判明し、一二月二四日県教育委員会文化課の係員が現地を視察して発掘調査の必要な事が明らかとなった。一方、県倉吉土木出張所から遺跡発見届が提出された。よって東郷町教育委員会が発掘調査を実施し、山本がその発掘を担当することとなった。

発掘調査は、昭和四七年一二月二三日に開始し、四八年一月六日に現地の作業を終り、遺物の整理作業等は続行中である。

【注釈】

山本が調査の指導を行ったのは、12月23日から28日までで、29日と1月4日～6日の追加調査は（12月30日～1月3日の間は年末年始の休みを取ったらしい）町教育委員会が行い、山本には高橋真由教育長から調査の状況が報告されたことが「門田貝塚の発掘調査について」という文書から知られる。

「四 調査の範囲と区分」

発掘した範囲は新設の門田橋西詰南側のあたり、東西約一四メートル南北約一〇・五メートルの、もと水田であった地面である。はじめ貝層の発見された橋脚至近部は遺跡面が破壊されているよう見受けられたので、橋脚から約四メートル南方に橋と平行し、西方の民家の宅地ぎわの所から東方へ、一辺四メートルのグリッドを四個連ね、これを西からのⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳグリッドと名づけ、これを基幹とし、状況に応じその周囲にグリッドを設ける方針をとり、発掘の進行にしたがいⅢの北にⅢN、南にⅢSを設け、また、Ⅰの南にⅠS、Ⅱの南にⅡSを設けて調査した。これらの調査により、残存貝層の範囲と遺跡の性格・遺構の主なもの把握できたと考え、調査期間の制約からⅣ・ⅡS・ⅢSの一部（調査区分図に点線で示したあたり）は発掘を省略した。

【注釈】

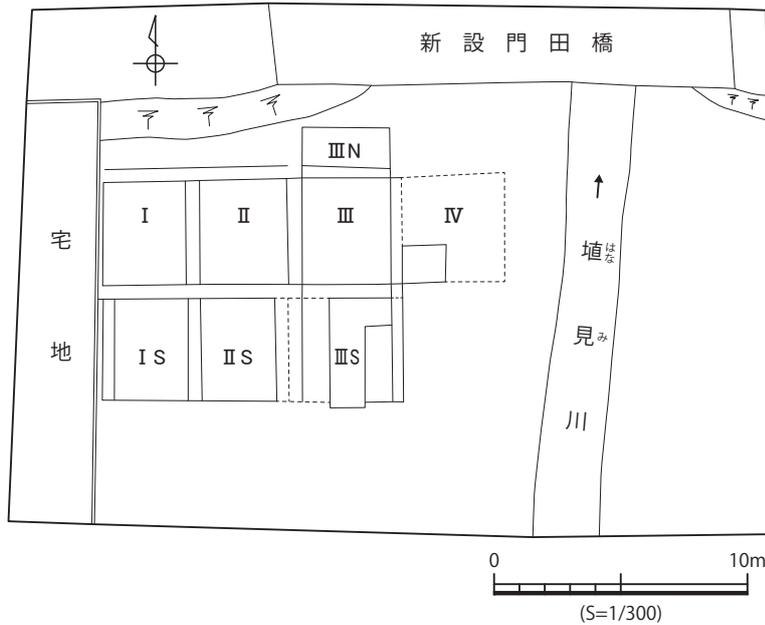
記述から調査は年末年始の極めて限定された期間に設定されていることがわかる。しかし、調査の進展に伴う柔軟な対応策がとられていたことも承知される。なお、令和3（2021）年11月に、湯梨浜町教育委員会による、県道長和田羽合線（門田橋工区）歩道設置工事に伴う試掘調査が、門田橋の北西方向に接して行われたが、遺構や遺物は確認されなかった（湯梨浜町教育委員会2023）。

「五 調査の経過」

日をおうでの発掘調査の経過はおよそ次の通りであった。

（一二月二三日）

① グリッドⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ設定。遺跡の地面上に工事で投棄されている土を除き、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの表土（耕土）＝



第2図 グリッド配置図

第一層を除去。表土は厚さ約一五センチである。

② 平板測量で、設定したグリッドおよび付近の地形・地物の平面図作製。

(一二月二四日)

① グリッド I・II・III の表土の下の青灰色土層=第二層を除去。第二層は厚さ一五センチばかりで、その下部には白色のあらい砂がまばらにまじる。

また、この層には煙管など少量の近世遺物が含まれ、下部では土錐・陶質器など少量の中世遺物が含まれた。第二層を除くと、I と II の大部分では砂層面が露呈。II の東部は砂層の上にうすく貝の散布を見る。III は第二層の下は貝層（やや土を混ず）である。各グ

リッドとも、砂層上面または貝層上面に土錐・土器片・銅銭・もものたねなどの遺物がかなり多数散布する。

② 平板測量で昨日に引き続き付近地形地物等を記入。

(一二月二五日)

① I・II の砂層上面を完全露呈。これが遺構面=生活面である。柱穴様の落ち込み部を掘り下げる。III は四区に等分し（北より 1~4）I 区の貝層を掘り下げる。貝層中・下部とも含有遺物は同様である。

(一二月二六日)

① III の 1・2・3・4 区それぞれ貝層を発掘。

② IV の表土と第二層を除き、貝層を発掘。IV では東半は工事で破壊されていることが判明したので発掘を省略。

③ I・II の柱穴様ピット実測。各グリッド壁面土層実測。

(一二月二七日)

① III の 2・3 区貝層発掘。III S・III N・IV をそれぞれ発掘。III の 2・3・4 から III S にわたる杭列露呈。

② III・III S の杭列等実測。

(一二月二八日)

① I のあぜ・II のあぜ・III S のあぜを撤去。I のあぜの南端に井戸状遺構検出。II の北端部を地表下約七〇センチまで掘って砂層の深さを見る。砂層はより深部まで変化しないものと判断。

② 遺構実測図・土層実測図を補足。

(一二月二九日・一月四日・五日・六日)

① I S・II S 発掘。

② 同上遺構・土層実測。

③ I・II 補足調査。

④ 同上実測（とくに、井戸状構造。遺存柱根等）。

【注釈】

調査の経過を見ると、表土の下に第2層の青灰色土層があり、I と II ではその下に砂層が堆積し、III では貝層が展開していた。青灰色土層には煙管などの近世遺物が含まれており、下部には中世遺物が含まれていた。また、

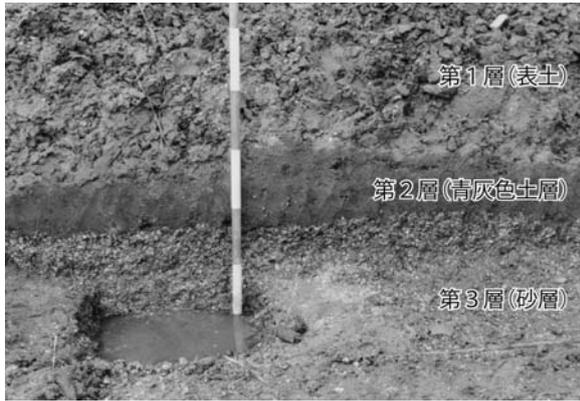


写真 2 - (1) I 区土層堆積状況

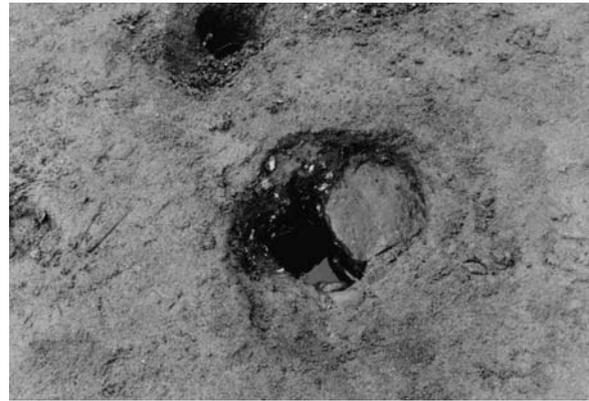


写真 2 - (2) I 区曲げ物出土状況

貝層上面にも砂層同様に土錘・銅銭・桃の種・土器片が多数採取された。

煙管に関しては、埋め立て工事期のものか、松江市のタテチョウ遺跡でも同様の状況が確認されている。

「六 遺跡」

(1) 土層構成

発掘範囲全体を通じ表土＝第一層は厚さ一五～二〇センチの黄褐色耕作土で、その下に厚さ一五センチばかりの青灰色土層＝第二層があり、この第二層下部には大粒の白色砂粒をまばらに含む。総じて第二層にはわずかに少量の近世遺物を含み、その下部には、第三層上面および貝層に含むと同種の遺物を少量検出した。第二層の下は、I・IIのグリッドではほとんど土を含まない砂層であって、これを第三層とする。第三層上面は遺構のある生活面である。

IIIグリッドでは、IIとのきわのあたりから砂層上面は東方へ急傾斜して約五〇センチ落ちこみ、ここに、第二層と砂層との間に厚さ五〇センチほどの貝層が介在するという構成である。貝層を構成する貝は、ほとんどしじみで、少量のたにしを含み、きわめて稀にさぎえなども見られる。

IIIに隣接するIII N・IVおよびIII Sの北部約二メートルの範囲はほぼ同じ厚さの貝層もしくは泥土貝層があった。すなわち貝の堆積は東西約六メートル、南北約八メートルの範囲に遺存したのである。本来はさらに東と北に広がっていたと思われるが、それは工事ですでに壊滅していたのである。なお、III Sの東半部は砂層上面はIIIとほぼ同高で、第二層と砂層との間には貝層の代りに黒色土層が介在する。

I SとII Sとは、I・IIと相似た土層構成であるが、第三層たる砂層の上部は、やや厚い混土砂層をなしていた。

(2) 遺構

㉑ 柱穴または杭穴乃至その可能性あるもの

I・II・I S北半・II S北半を通じて四四穴ほど検出され、そのうちの四穴には小形の柱根が遺存した。地面が砂であるためもあって、これらの柱穴から建築物の復元形を推定する事は困難である。

㉒ 焚火跡

Iで直径四〇センチばかりのもの二か所を検出した。両者とも地面が赤褐色に焼けていた。

㉓ 井戸

Iの東南隅のあたりに径五〇センチばかりの曲げ物作りの井戸わくが地面下に遺存し、中に径三五センチほど

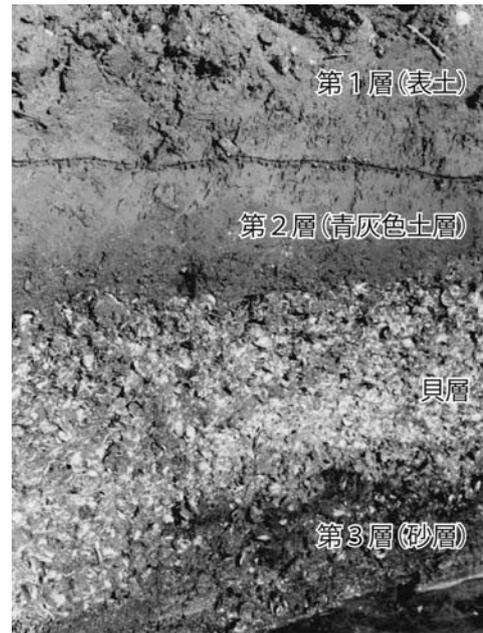
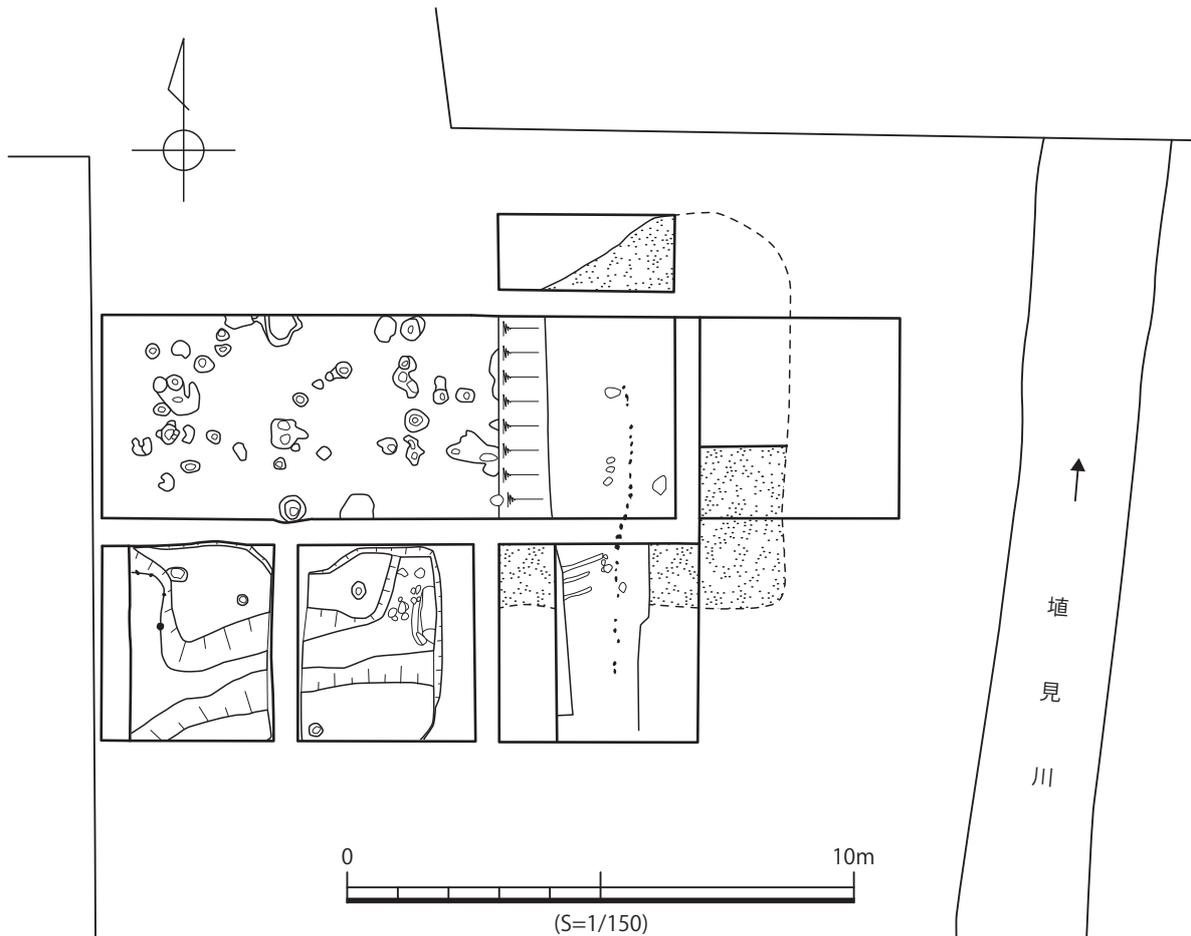


写真 3 III区土層堆積状況



第3図 門田橋遺跡遺構配置図

の同様円形の曲げ物を砂中に仕組んだもので、中に漆塗りの椀片が遺存した。

④溝

I S・II Sのほぼ中央を東西に幅一・五メートルほどの溝が走り、I S西端では南北に広がり、II S東部では北に屈曲し、上記井戸状構造を大きく囲むかのような形を呈する。

⑤杭列

ⅢからⅢ Sにかけて、グリッド西端から二・五～二・三メートルのあたりに、長さ五・八メートルのほぼ直線の杭列があった。杭は先端を尖らした長さ六〇～八〇センチばかりのもので、三〇センチばかり砂層上にあらわれていた。

また、I Sでは、溝底の線に沿うた四本の杭列があった。これら杭列は、砂地である生活面の護岸ないし、埋め立ての護岸と考えられる。」

【注釈】

「六 遺跡の項目」は(1)土層構成と(2)遺構から成っている。土層構成をみると、まず厚さ15～20cmの黄褐色の耕作土(表土・第1層)があり、続いて厚さ15cmの青灰色土層(第2層)がある。I・IIグリッドではその下は砂層である。Ⅲでは東方へ急に落ち込み第2層との間に厚さ50cmのシジミを主体にした貝層が堆積していた。遺物は、第2層にわずかな近世遺物を含むほかは、第2層下部には、大粒の白色砂粒をまばらに含む層があり、第3層上面及び貝層と同種の遺物を検出していて、時期差が認められることから、2層下部とするより、間層を設定するのが妥当であろう。第3層である砂層及び貝層の上面が遺構面である生活面となっていた。遺構のある生活面とされる第3層の砂層は埴見川の方に下っており、そちらに向かい貝の堆積が行われた状況が

うかがえる。なお、遺構の端になるISとIISの砂層上部は、やや厚い混土砂層であったことから、地盤強化の工事がなされたことを想定することも可能であろう。

遺構で注目されるのは、IS・IISで検出された一辺約6mばかりの方形区画を構成する幅およそ1.5mの溝である。その内には、4個の柱根を持つ柱穴や2か所の焚火跡、中央に井戸を取り込んだ建物が想定されるが、山本が結語で触れているように、住居もしくは作業小屋などの可能性も含め、その性格については検討が必要に思われる。その結果は、「東郷荘之図」に描かれる建物と集落の性格の理解にも影響を与えるものになる。その他では、この建物を含む方形区画の周辺には、護岸のための杭列などが確認され、地盤強化工事と共に、湖畔縁辺部での生活の工夫の一端を窺うことができる。



写真4-1 遺構検出状況(1)



写真4-2 遺構検出状況(2)



写真4-3 III・IIIS遺構検出状況

「七 遺物」

第二層（黒灰色土層）検出の少量の近世的遺物は省略し、第三層上面および貝層から検出した遺物を総括すると、およそ次の通りである。

- | | |
|--------------|----------|
| 一、銅銭（唐・宋・明銭） | 二一 |
| 二、土錘 | 五五〇 |
| 三、砥石 | 一 |
| 四、陶質器・土器類破片 | 約みかん箱一ぱい |
| 五、もものたね | 三〇 |
| 六、動物の骨 | 数種類約二〇片 |

これらについて、やや具体的に、またその出土状況を付記するとおよそ次のようである。

① 銅銭

種類は、開元通宝二、景祐元宝二、皇宋通宝一、至和通宝一、嘉祐通宝一、治平通宝一、熙寧元宝三、元豊通宝三、元祐通宝一、紹聖元宝一、永樂通宝一、不明二であって、これらは、I・IIグリッドの砂層上面＝生活面およびIIIグリッド貝層上面・中部・下部の各所に広く散在していた。

これら古銭は、この遺跡の年代を端的を示すもので、明銭永樂通宝の混在から、室町時代（近世銭流通以前）に属することを示している。

② 土錘

遺物中もっとも数多く、ほとんど長さ四センチ内外の紡錘形小形品で、僅かに大形品を含む。古銭と同様生活面と貝層の全域にわたり散在した。貝の堆積とともに、この遺跡における生活の特色を端的に示す遺物として注目される。

③ 砥石

断面四センチ角ほどの品の折れたものである。

④ 陶質器・土器類

④a 土鍋類

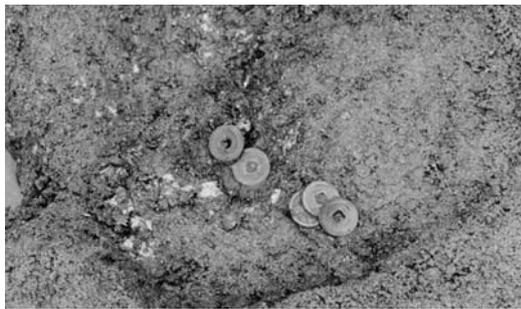


写真5-(1) 銅銭出土状況(1)

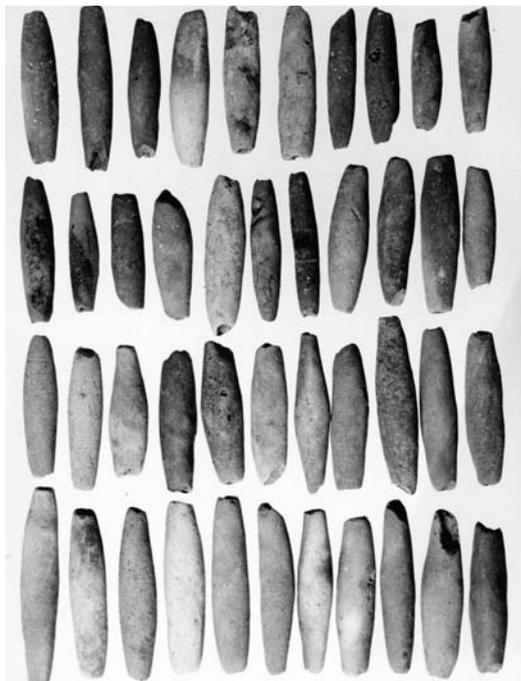


写真5-(2) III・III S遺構検出状況

焼物類の大部分をしめる。質は須恵器に似てやや吸水性があり、色調は現代の黒瓦に近いものが多い。径三〇センチ内外、深さ一〇センチ余、整形は輪積法により、内面は水引きを施し、外面は粗面のままである。この種の品のうち、数はやや少ないが外壁上部に低い釜の如く突帯をもつものもある。

③土器(かわらけ)類

ほとんど、きわめて粗雑な作りであるが、焼成はよく、かなり堅い。土鍋類に比し量的には少ないが、個体数はかなり多い。

④瓦質打痕文土器

外面は須恵器の如く、細かい格子目叩き文を施し、内面は打痕あるものと平滑なものとのある。色調も質も黒瓦に近い。

⑤須恵器

少量であるが、外面に叩き文をもつ大形品破片、内外無文の大形品破片等がある。

⑥青磁・白磁等

小片が微量

⑦もものたね

やや小形である。Iの砂層上面、およびとくにIII・IVの貝層から多く検出された。

⑧動物の骨

III・III S・IVから検出され、中に大形の獣骨などがあるが、未整理である。」

【注釈】

貝層 まず、貝層を形成する貝はほとんどがしじみで、少量のタニシと稀にサザエがみられるのは、川漁や日本海に出かけることもあったようであるが、出雲市の上長浜貝塚のように、鉄製の釣針の出土はなく、あくまでも、東郷湖内の漁撈活動が中心であった

銅銭 この遺跡から出土した遺物で特徴的なのは、砂層や貝層上面から採集された21点の銅銭(写真5-(1)、写真10)である⁶⁾。銅銭は砂層上面や貝層上面だけでなく、中部・下部からも広く散在していたことから、この場所での生業に何らかのかかわりを持っていた結果の現われのように思われる。山陰でも、13世紀半ばには銭が利用されるようになっていたという(西田2021)。瀧湖のほとりに位置する地理的立場から、盛んになった日本海交易に連携した湖上交通、その他社会の新たな変化に素早く対応した一面を伺うこともできそうで、銅銭の出土は注目されよう。山本は、永楽通宝(1408年初鑄)の出土から、これらのものが室町時代に属するとしているが、消費遺物の出土量や、他の遺物との総合的な検討を踏まえると、後から述べるように、13世紀に盛期を迎えた湖畔を舞台にしていた生業の家屋(小屋)が、15世紀初頭まで細々と継続していたか、相当の時間が経過して同地が再び利用されたのかなどとする理解が可能ないように思われる。

土錘 土錘(写真5-(2))の出土は、こうした環境にある遺跡としては自明であろう。

陶質器・土器類 次に、この遺跡から出土する遺物の大半を占めるのは、陶質器・土器類の中の土鍋類である。この分野の研究業績は二、三のものしかなく、必ずしも豊富とは言えないが、まずは先学の論述にすり合わせ、

時期や傾向について検討したい。

土鍋 中世の土鍋に関する最新の知見は、『新版 概説中世の土器・陶磁器』（日本中世土器研究会2022）の記述であろう。山陰の地域論を担当した中森らが、土鍋類について、「古代から続く甕形から11世紀代になり鍋形（土師質）が出現し、これが12世紀代に定着する。当初の口縁形態は、くの字状に外反する。西伯耆では、端部をやや上方に向け受け口状を呈するものも見られる。瓦質については、因幡・伯耆ともに12世紀後半頃からみられるが、因幡においてはこの後、土師質が減少し、瓦質が主体となっていく。また、口縁部が受け口状を呈するものが12世紀末～13世紀から出現、以後とくに因幡において使用されていく」としている（中森ほか2022）。山本が報告に記すように、この遺跡の主体を占めている資料が同様の特徴を有しており、この点を踏まえると、因幡だけでなく、受け口状の土鍋は、東伯耆においても使用されていたといえよう。写真6-(5)～(7)は、土師質のものを含まず、胴部も丸味を呈するところから、この問題に言及してきた八峠興が提示した中世Ⅲ期（13世紀前半から14世紀初頭）の前半に比定されるものと思われる（八峠1998・2004）。また、早く「因幡・伯耆の調理具」で鍋・釜を取り上げた加藤裕一は、門田橋遺跡から出土した「ほぼ横方向に屈曲し、外方へ伸びた後、上方、もしくは斜め上方へ屈曲するもの。口縁部が断面「逆L」字に近似した形態となる」顕著な一群と同様の資料を瓦質鍋Ⅱ類に分類したが、時期については、資料の不足もあり言及を控えている（加藤2007）。

羽釜 また、山本は、大部分を占める土鍋から、突帯を持つ（羽）釜（写真6-(1)～(4)、(8)、写真7-(4)）のグループを分出した。今、瓦質羽釜と呼ぶ一群で、時期や傾向は資料に恵まれず不明な点が多い。八峠の成果（八峠2021）に照らすと、土鍋類は煮炊具の瓦質鍋と瓦質羽釜に当り、中世Ⅲ期（13世紀前半から14世紀初頭）から一般的に出土する。鍋は内外面の刷毛目調整と指圧痕を残し、羽釜は、ナデもしくはケズリや指圧痕を残すとしている。いずれも、土師質と瓦質のものがあると指摘されているが、本遺跡では、調査者の報文にあるように瓦質のものが大部分を占めている。加藤の発表などを踏まえ、中森は、瓦質羽釜について、門田橋遺跡の位置する東伯耆では、「瓦質Ⅰ類がおおむね12世紀後半からみられるようになる。伯耆では体部が直線的に外傾し、口縁部へと続くものが主流で一方、因幡では体部が丸みを持ち、口縁が内湾するタイプで占められるという違いがある」と整理している（中森ほか2022）。

鉢 なお、山本は特に言及していないが、図版の土鍋の範疇で報告されながら、細かく見ると、区別してあるように見える写真7-(1)～(3)、(5)～(7)の一群には鉢として分類されるべき器種が含まれている可能性もある。鉢に関しては、山陰では、東播系須恵器と越前焼がまず搬入品として確認されるという。東播系須恵器は、島根県・石見の益田地域に多く、東部に向いて減少し、時期は12～13世紀を中心とする。この資料を整理した伊藤は、「山陰においては、11世紀後半頃に東播系須恵器の搬入が始まり、12世紀中頃～後半がピーク、13世紀代にも一定量の搬入が継続され、14世紀代で搬入が終わる」と言っている（伊藤2015）。しかし、一方で、山陰において際立った出土量を見せる石見・益田地域から出土した遺物について、東播系須恵器の搬入品なのか、周辺で生産された模倣品なのか、議論が必要であると指摘している。最新の知見をもってしても、中世前期の東伯耆における鍋・羽釜・鉢などの編年や流通の状況はなお、判然としない点もあり、産地の判定を含め、山本の報告書から判断するのは困難が伴う。

土器（かわらけ） 土師器の杯や皿が見受けられる（写真9）。特に山陰ではこの分野は精力的に検討が行われてきて成果も上がっている（中森ほか2022）。伯耆・因幡においては、12世紀後半から土師器皿が増加し、主体的な器種になる。杯は13世紀代にはほとんどみられなくなるという。皿は小型化が進行し、手づくねの皿が中世Ⅲ・Ⅳ期に出土するのが、伯耆の特徴とされている。写真9-(5)の右は、柱状高台とよばれているもので、伯耆・因幡では11世紀後半から現れる。ほとんどの地域で出土するのは古代末期から中世前期に限定される。北陸を除き13世紀中葉頃急激に姿を消すが、中国地域は後半まで残るという。出雲大社本殿柱基底部の柱穴から13世紀前半の柱状高台の杯と皿が出土した。写真9-(5)右は12世紀まで遡る、少し古い時期のものかもしれない。



写真6 出土遺物（土鍋・羽釜）



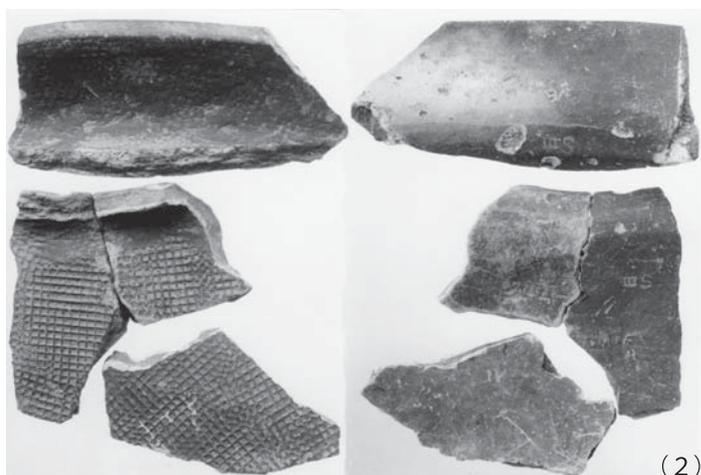
写真7 出土遺物（土鍋）



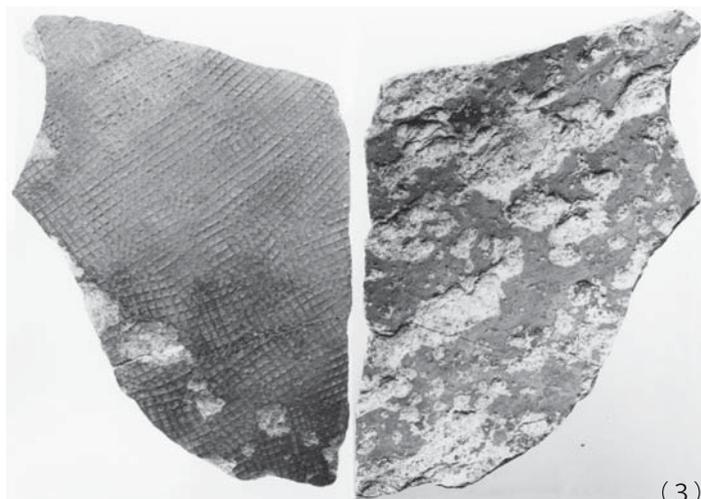
(1)



(5)



(2)



(3)



(6)

写真8 出土遺物 (中世須恵器)

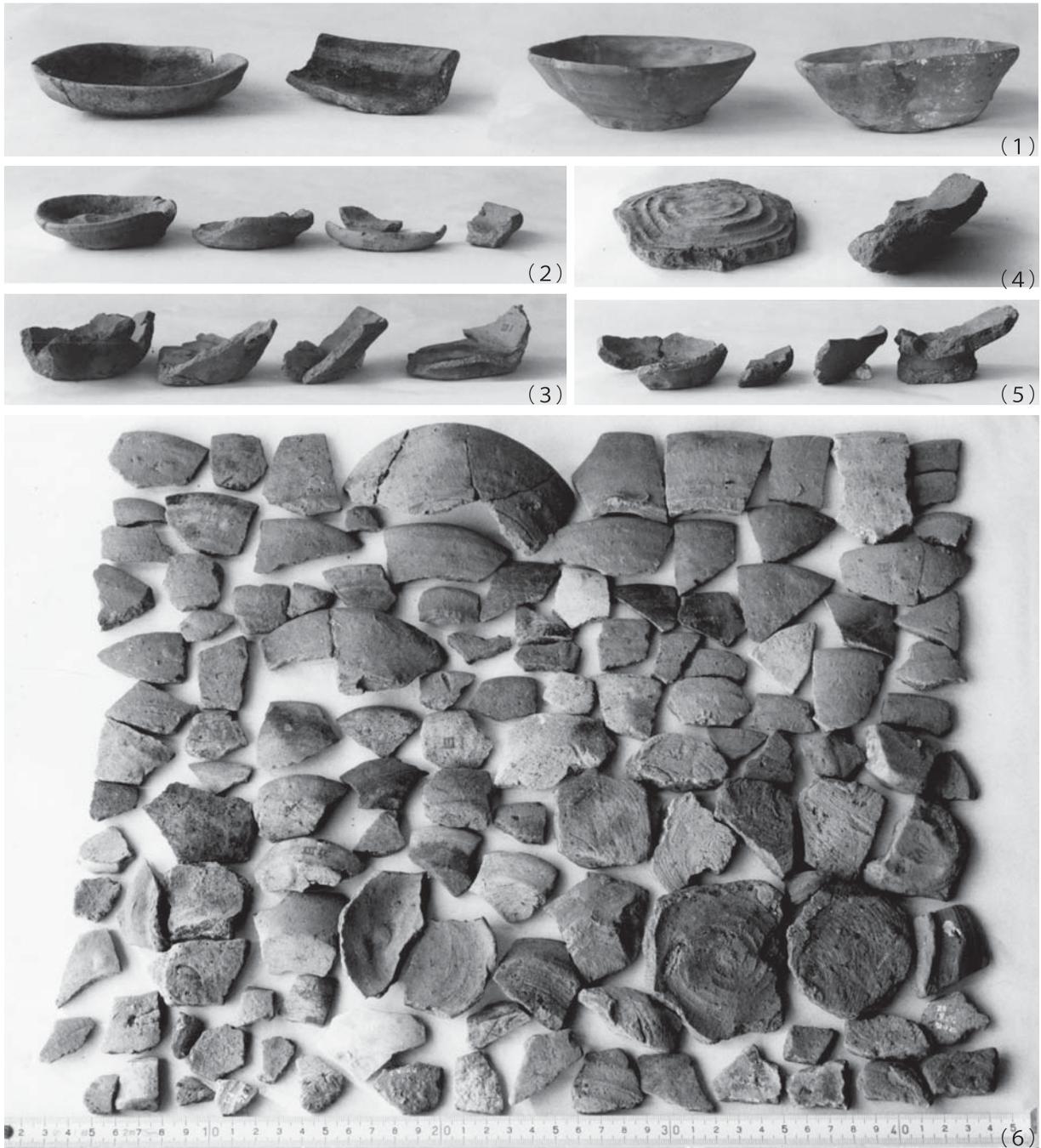


写真9 出土遺物（土師器皿・坏）

土師器皿には口径と底部径が近く、器高の低いものが見受けられる。

中世須恵器 山本は、その他では外面格子目叩き文を持ち内面に打痕を有する一群（写真8-(1)~(3)）を古代の須恵器と区別して、瓦質打痕文土器と呼んで分類した。山陰では昭和50年代中頃になり、やや軟質の須恵質のもので、外面に格子の叩き目を有するものや、平行叩き目を有する甕などが中世須恵器として報告されるようになったが⁽⁷⁾、山本が瓦質打痕文土器としたものは、この一群を指していると思われる。尤も、内面の打痕としたのは、使用中に起こった器壁の剥落によるものがそう見えたのではあるまいか。門田橋遺跡出土品は、内面の他の部分から判断するとヨコ・タテ方向の刷毛目の調整が行われているように見え、胎土もやや軟質に見える。八峠によると、当該地域では、中世Ⅰ期までは、東播磨系と考えられる壺・鉢が見られ、中世Ⅱ期からⅢ期にかけて、硬質で外見格子目叩きの勝間田の壺甕類が出土し、これに併行あるいは後出して亀山系須恵器が多く出土す

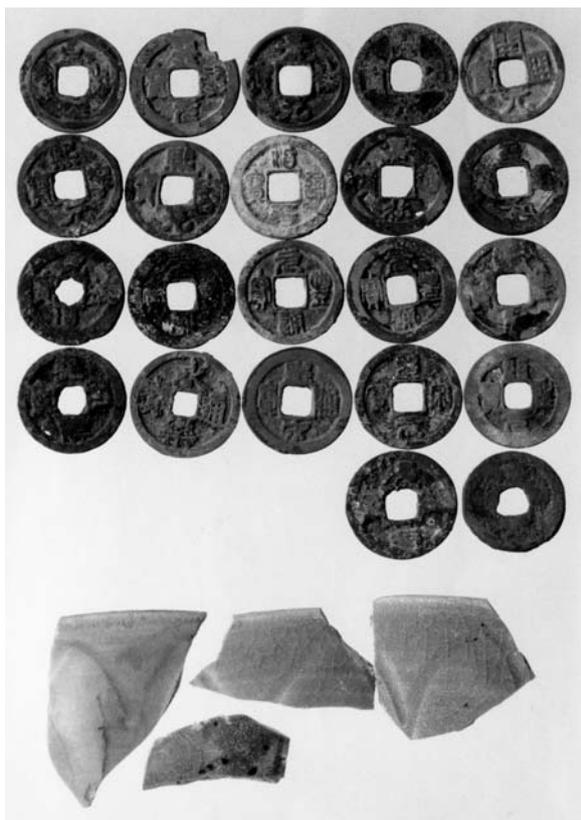


写真10 出土遺物（銅銭・青磁）

るようになるという（八峠2004）。写真8-(1)~(3)、第5図35・36がこれらに当たるが、外面の格子目叩きや内面の調整の違いも個別にあり、また、鳥取県内で出土する資料が、勝間田や亀山とは微妙に異なる点があるので、在地での生産も視野に入れる必要があるとも指摘するが、窯跡が発見されていないので、現時点では複数の生産地からの搬入という理解（八峠2003）をとりたいたいというのが鳥取県内での見解のようである⁽⁸⁾。

青磁 写真10と第5図24・25の青磁については、片切りで、蓮弁に鎬の隆起が観察されないことから、中世段階の貿易陶磁の編年表を作成した山本信夫の成果（山本2010）に従えばE期の標識磁器に位置付けられ、13世紀初頭から前半にかけて多く出土する龍泉窯系青磁碗Ⅱa類に分類されるものであろう。第5図の26は、口禿の白磁と言われる13世紀後半にピークを迎えた白磁皿である。動物の骨 動物の骨の中には、在来牛の前肢右の上腕骨とそれに続く前腕骨が含まれているという鑑定報告があるが、その他では、メモの形⁽⁹⁾で、50~60cmのウミガメの甲板やカメの各部の骨、タヌキの頭骨と思われるもの、体長50~60cmの漁骨、鶏大の鳥骨などがIV区から出土し

ており、Ⅲ区から、オオタニシ・岩ガキ・スミノエガキ・サトウガイ・サザエが採集されたことが記されている。

「八 結語」

この遺跡は、貝塚として工事中に発見されたが、破壊をまぬがれた貝層は、東西約六メートル、南北約八メートルの範囲に遺存した。この貝塚の西に接し、掘立柱を用いた遺構があり、焚火跡二ヵ所、井戸一基が遺存し、そこが住居跡もしくは作業の場であった。湖やその付近で、漁撈生活を営んだことが遺物から推測される。また、右の遺構の認められた所は、厚い純砂層の上で、湖辺の浜辺を思わせる。

この遺跡の年代は、遺物の示すところ、室町時代ないし近世初頭までのころと推定される。

遺跡の性格と年代が以上の如くであることから、荘園時代の稀な図や古文書に恵まれたこの東郷池周辺地域の関しては、この遺跡の示す事実は、この地の歴史の変遷を実証的にあとづけるのに得難い基本資料と考えられる。また、遺物に関しては、特に土鍋類等のまとまった資料が検出されたが、この種の庶民の日用雑器の事例は、全国的にもまとまった資料に乏しく、ことに山陰では不明の点が多いことからして、重要な資料であることを特記する次第である。（昭和四十八年一月記）」

【注釈】

この遺跡から出土する陶磁器を見ると、中世のものと近世のもの間に、相当の隔りがある。そのことは、層位的に確認される通りである。遺物の主体を成す鍋・羽釜は瓦質で、13世紀から14世紀初頭の特徴を示し、土師器杯・皿は一部やや古手のものを含みながら主体は13世紀代、青磁碗は13世紀前半の標識的なものである。今明銭の問題を置いて、この遺跡は、13世紀ないし13世紀後半を盛期として営まれた可能性があり、東郷池の縁辺部に位置し、漁撈採集の生業に勤しみながら、農業生産従事の可能性も持ち、物資の交換に銭貨の使用もしていた人々の生活の一端を現わしていると思料することは許されるかもしれない。本遺跡の中心的な年代観を踏まえ



第4図 「伯耆国東郷庄下地中分絵図写(抜粹)」(東京大学史料編纂所)を改変

れば、「伯耆国河村郡東郷庄之図」(第4図)に描かれている村落の生業の実態を究明する上で、山本のまとめた調査概要報告は、検討するべき成果の一つということになり得るものと思う。

【補足資料】

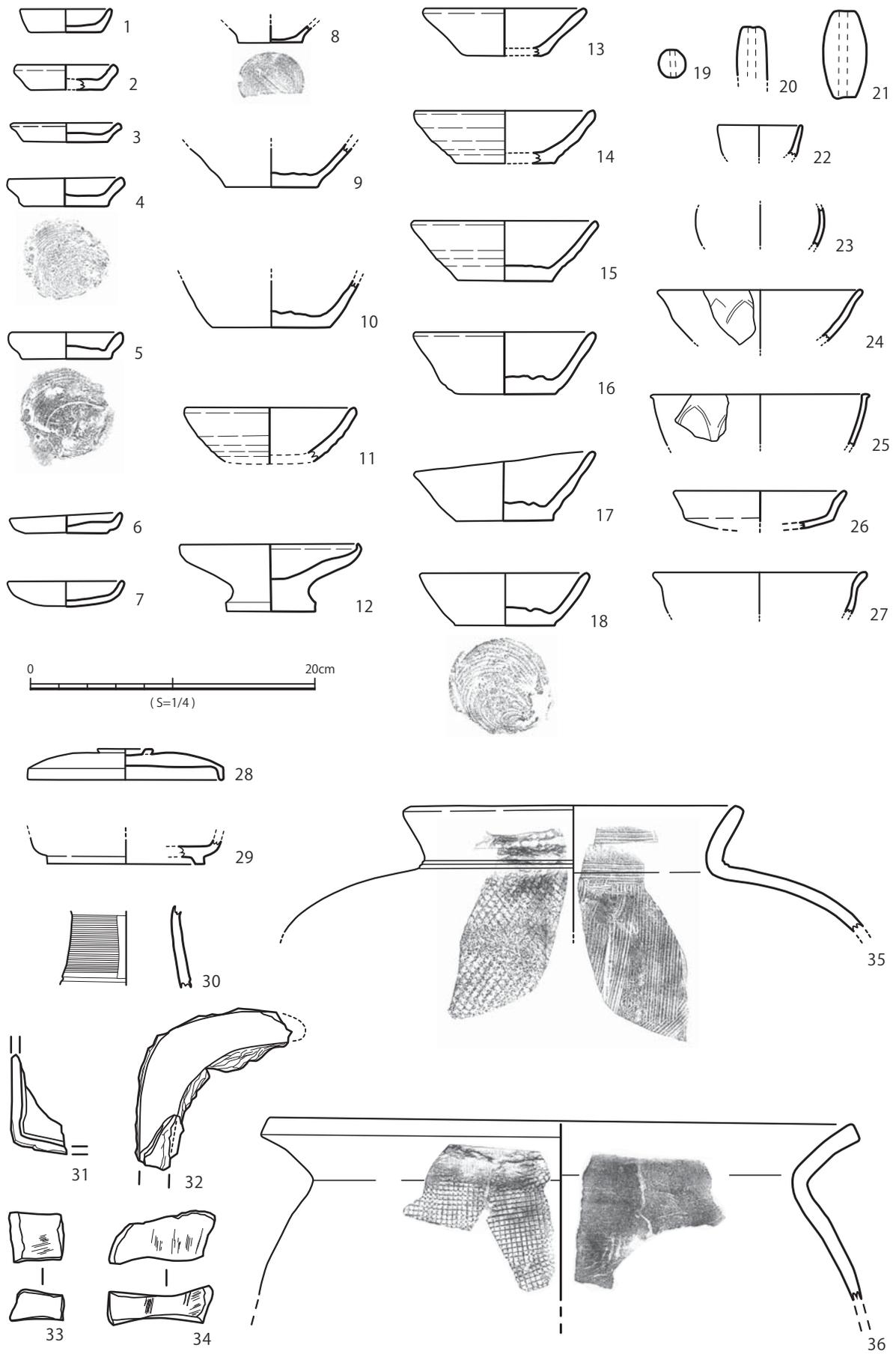
山本の概要報告に掲載されている遺物の実測図はほとんどないが、資料全体に改めてあたったところ、鍋・羽釜・土師質皿などの実測図面が相当数確認された、資料の少ない山陰のこの時代を検討する上で真に貴重なものと思われるので、トレースを行ない、「概要報告」の「補足資料」として、掲載することにした。

鳥取の煮炊具の集成をして相互の関係を検討しようとした八峠の資料(八峠2021)を見ると、県中部の倉吉市周辺では、20遺跡から「くの字口縁の土鍋」が26点、「受け口縁」の土鍋が67点、羽釜58点が出土している。威信財が出土し、有力者小鴨氏との関係が注目される、倉吉市の山ノ下遺跡が最も多いが、くの字口縁土鍋2点、受け口縁土鍋34点、羽釜24点で、他は総で一桁台前半である。門田橋遺跡からは図化した資料だけで、受け口縁土鍋10点、羽釜27点があり、資料的にも一つの傾向を指し示すほどの量を有していることがわかる。また、八峠は、鳥取においては、鍋釜類がまとめて出土する遺構(土坑)があることに注意を払っているが、その性格・位置づけについては言及がない。

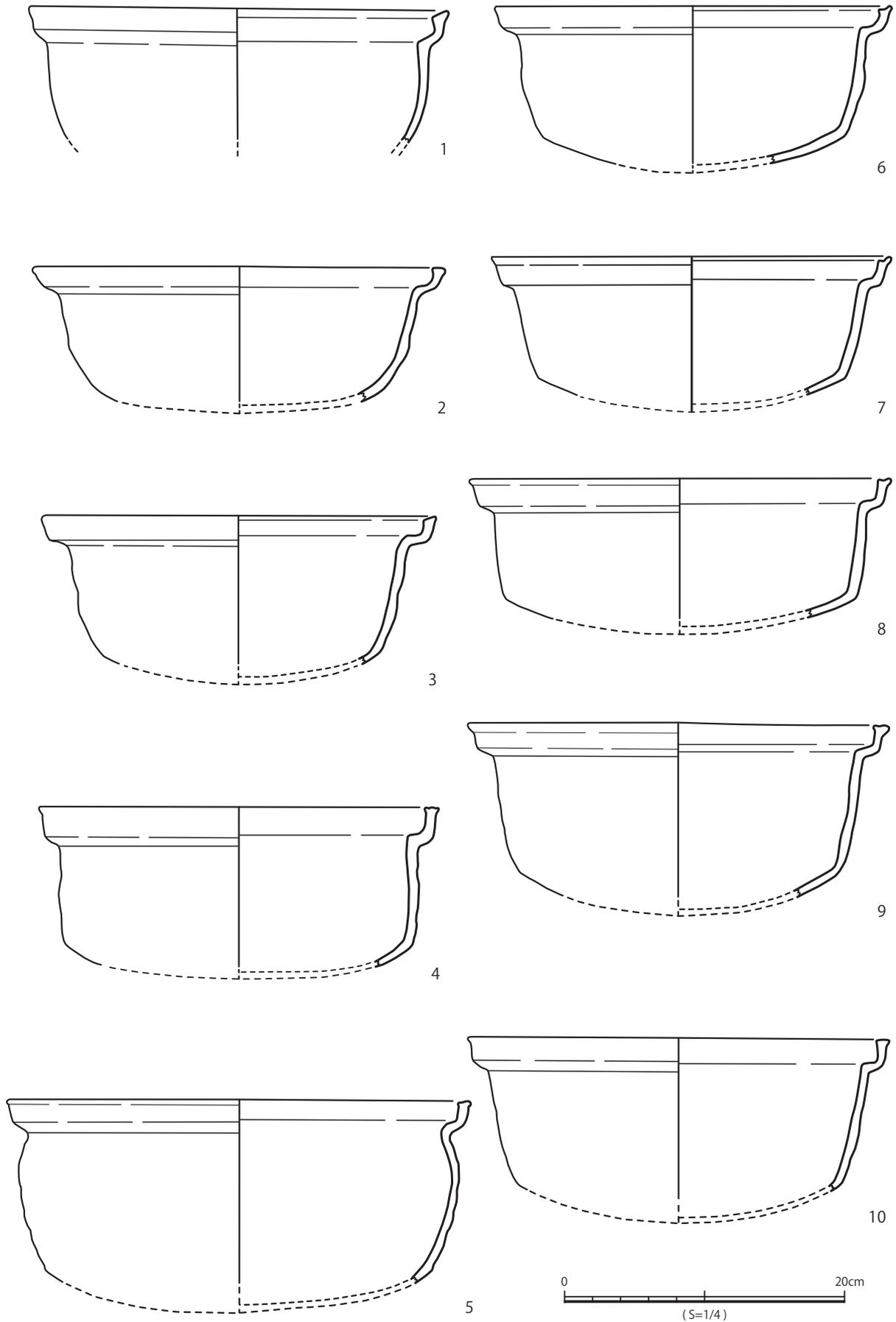
第5図は土師器皿・土師器杯・土錘・中国製青磁碗、白磁皿・碗、須恵器・硯・砥石・中世須恵器の実測図が、第6図には、受け口の土鍋類が、第7・8図には羽釜、第9図には、突帯の低い羽釜と突帯のつかない資料の実測図を掲載している。

第5図の1～7は中世Ⅲ期に属すると考えられる土師器皿である。12世紀後半から進んだ皿の小型化の特徴を備え、器高は低く、口径と底部はあまり差がない。基本的な回転台成形に、手づくね成形も見られる段階の資料である。杯(第5図8～11、13～18)は、底径は大きくなるが、器高はまだやや高く、さほど内湾せずに立ち上がっているように見られる。12の柱状高台は注釈に記述の通り。

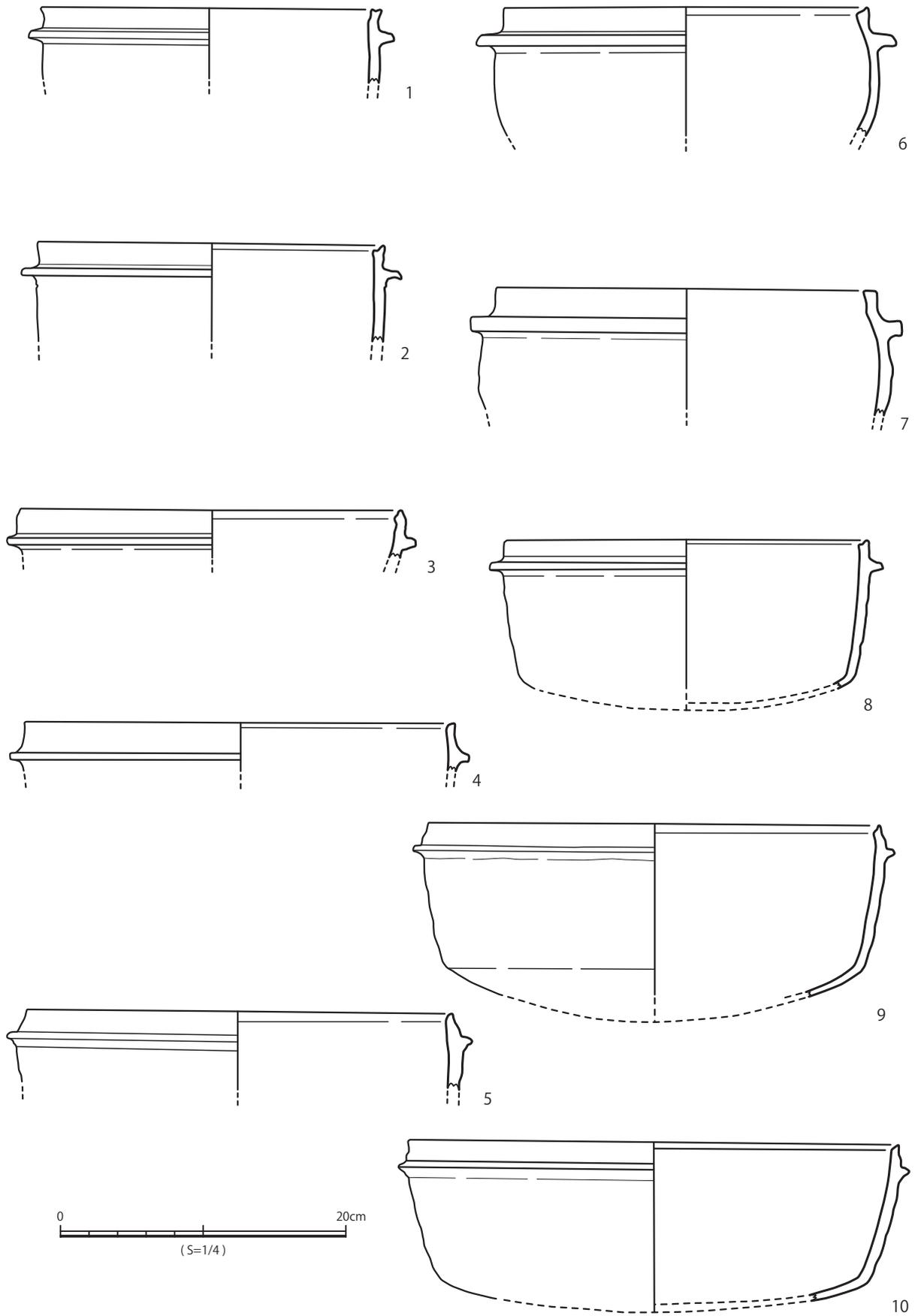
第6図は土鍋であるが、すべて受け口を呈している。瓦質の土鍋は12世紀後半から、口縁部受け口状のものは12世紀末～13世紀から出現し、以後、特に因幡において使用されていくとされてきたが、門田橋遺跡の土鍋の傾向を見ると、その見解は少々訂正の余地がありそうである。



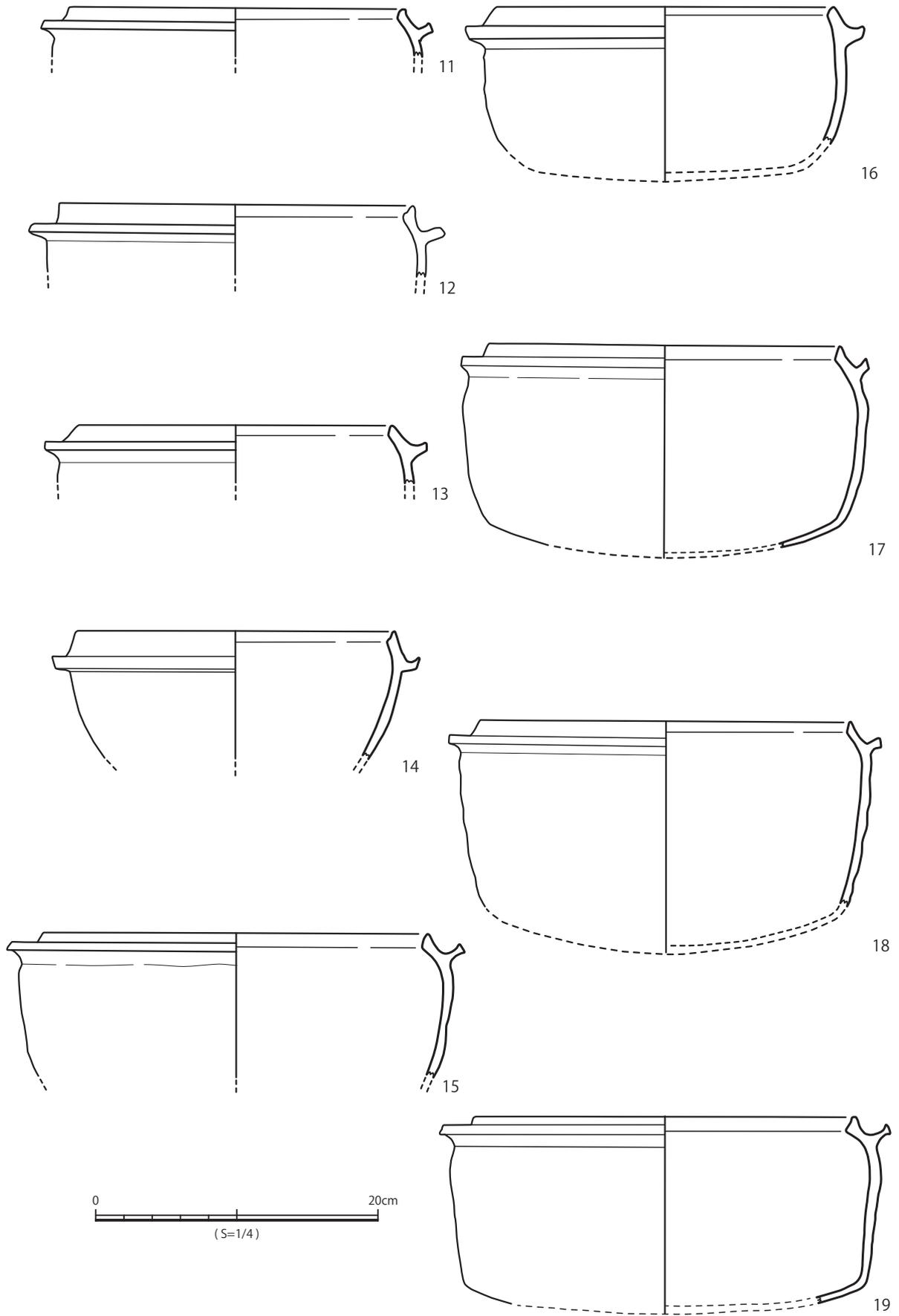
第5図 出土遺物実測図 (土師器・中世須恵器・貿易陶磁器・その他)



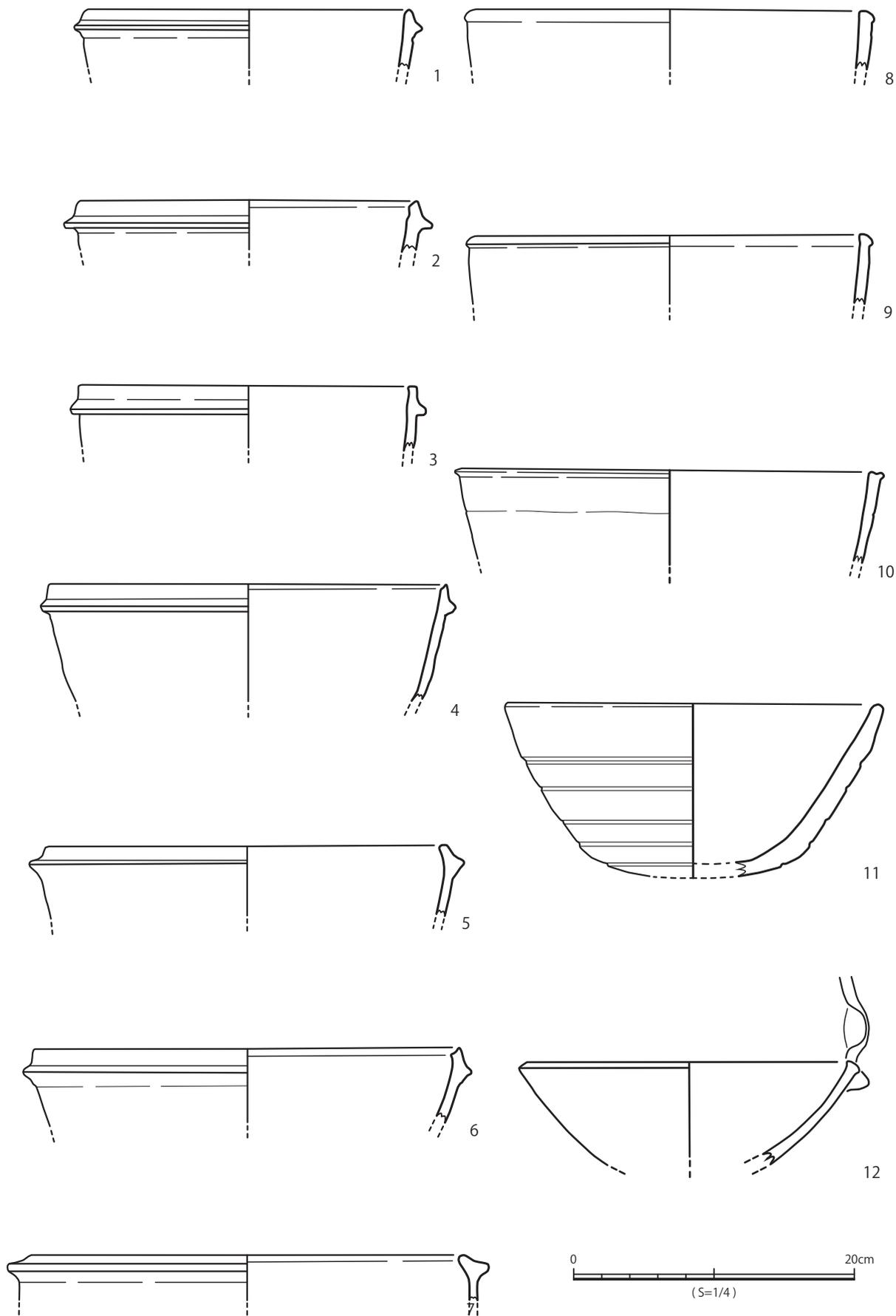
第6図 出土遺物実測図（土鍋）



第7図 出土遺物実測図(羽釜①)



第8図 出土遺物実測図（羽釜②）



第9図 出土遺物実測図 (羽釜③・鉢類)

第7～9図は羽釜のうち、第7図は立ち上がりが直線的なものを、第8図は口縁部が内湾気味のものを、第9図は突帯が低い一群をまとめている。羽釜に関しては、研究成果が見出しにくい状況であるが、おおむね12世紀後半から出現し、前述したように、伯耆では、体部が直線的に外傾し、口縁部に続くものが主流であるが、因幡では、体部が丸みをもち、口縁が内湾するタイプで占められるという違いがあると指摘されてきたが、この遺跡では双方が出土しており、東伯耆の傾向は因幡に近いものを感じられる。

おわりに

現在では、日本海沿岸の中世遺跡が、当時の地球規模での自然環境の変化により、大きな影響を受けたことについては、各地の発掘報告書などにより、知られるところとなった。

石川県の名神大社気多大社の社家館や北加賀の中核的港湾集落であった普正寺遺跡、北の世界を代表する青森県の十三湊遺跡など多くの遺跡が、14、15世紀頃に廃絶している。これらの遺跡が終焉を迎えた原因は、地球の寒冷化による海面低下・海岸線の後退による飛砂の影響によるものであった。(村上2009)鳥取県でも例外ではなく、早く報告された鳥取市の身干山砂丘の遺跡(久保1981)だけでなく、こうした例は多く、千代川以西では、賀露千軒・小山千軒・伏野千軒・矢口千軒、東では、浜坂砂丘の湯山千軒・大谷砂丘の日比野千軒・浦富砂丘の浜田千軒などの集落が戦国時代末期までに飛砂により埋没している(大西ほか1961)。

さて、東郷池はというと、天神川河口の長瀬砂丘が数メートルの高さしかなく、海からの風は、長瀬高浜遺跡の乗る砂丘を超え、平地を東郷池に吹き抜けた。東郷の潟湖は南方山地からの土砂の搬出が少なく、遺跡の砂層の理解には、小河川による堆積のほか、こうした面にも留意しておいても良いように思われる⁽¹⁰⁾。

「東郷庄之図」(1258年)と同じく、鎌倉時代に制作された「出雲大社神郷図」には、内鳥居の南に、門前の田地をまたぐ形で南側の砂丘地との間に参道が設けられており、砂丘上には、外鳥居が描かれている。(井上1991)すでにこの時代までに飛砂現象に見舞われていたことが分かり、以後江戸時代に至る絵図等を見ても、境内の西にある丸山の山塊の山裾を吹き抜けて堆積する飛砂の状況がいずれも生々しく描かれている。数次の移動期を経て複雑に発達した大社砂丘と神戸水海を挟んで営まれたのが、奈良時代から平安時代初期の貝層が堆積する出雲市の上長浜貝塚である。(出雲市教育委員会1996)神戸川の河口部に近い長浜砂丘の10メートル下位から発見されたが、潟湖の汀線に接して立地していることは共通しており、両者を比較することで、それぞれの特徴を明らかにすることが出来るかもしれない。

まず、両者に共通するものは、漁労活動であるが、上長浜貝塚では、鉄製釣針やヤスが出土し、外洋での釣漁や潟湖での突漁が想定されるが、門田橋遺跡ではそれほどの積極性は認められない。また、上長浜貝塚では焼塩土器が出土しており、保存食料としての活用が想定されているが、門田橋遺跡からは見当たらない。また、網漁に必要な土錘についても上長浜の方がバリエーションに富んでいる。

他にも異なる点があるが、潟湖に面して基本的に漁労活動を営む遺跡からの遺物として、両者を比較して特に異なる点は銅銭の出土のいかんであろう。前述のように、13世紀の半ばには、若狭小浜を中核とした西日本海の海上交通が盛んに行われるようになり、「東郷庄絵図」に描かれる日本海を航行する3艘の船の活動もその一例といわれている。潟湖は、海上交通と圏域の湖上・河川交通の結節点であり、銅銭の出土は門田橋遺跡の集落がこれらに何らかの関係を持っていた可能性を暗示させるものになっているのではあるまいか。ここからは貿易陶磁としての中国製青磁碗や白磁皿も出土している。

以上、特に、飛砂という現象から遺跡の環境などと、代表的な山陰の時代の近しい遺跡の在り様について見たが、自然環境の変化の影響は様々な現れ方をしている。特に潟湖周辺では湖水面の上昇・下降が現れ、想像以上の環境の変化をもたらす要因になっている。フェアブリッジ氏の海面変動曲線を援用すると、12世紀のロット

ネス海進から15世紀半ばのバリア海退の時期までに約2メートルの海水面下降があり、それは東郷池にも直結するものであった。門田橋遺跡の周辺を「東郷庄絵図」で見ると、意外に広い耕作地が展開していることに気が付く。この遺跡が13世紀後半を盛期とするなら、なお潟湖の湖水面は低下し、汀線が後退していた時期で、それほど単純な話ではないにしろ、前面（湖）に向かい耕地の開発が比較的容易な時代であったといえよう。この門田の集落は地頭分に含まれる地域であり、地頭一族の直営田が展開していたことが考えられる。（服部2004）埴見川が運搬する土砂と、飛砂と、後退する汀線による陸化現象で広がる耕作地に囲まれた集落では、地頭と関係を持った営農とそれに付随した活動の姿も想起せざるを得ない。

門田橋遺跡は、14世紀の初頭には主要な活動を終息したと考えられ、人々は、周辺他所に移転したことが想定される。中世集落から近世集落へ同一箇所へ変遷を重ねるところが少ないのは、早く新潟や千葉の事例（坂井2002、柴田1991）から知られるところであり、門田橋遺跡も現在の門田の集落位置と一致するとは限らない。社会構造の変化はもちろん、それを惹起する要因の一つである自然環境の変化は、以上に述べたような環境にあった遺跡では重大な意味をもったのである。

最後に、山本の報告と補足資料に沿いながら2、3の点に触れておきたい。

報告では多数の柱穴が確認されたが、住居跡と決めつけることをしていない。焚火跡二カ所と井戸一基を取り込んだ掘立柱建物に作業場としての可能性も考慮したようである。ただ出雲大社の絵図と東郷荘の絵図に描かれる海浜の集落の建築物はよく似ており、地面に残る遺構というものは、地層の関係もあり、住居跡であってもその程度であった可能性も否定できない。

また、山本は遺跡の年代を、室町時代ないし近世初頭までのころとしている。上層から出土した近世の陶磁は、江戸時代の後期の様相を示すもので、永楽通宝の出土からそのような見解を導き出したものであろう。永楽通宝の出土に関しては色々な解釈ができようが、しかし、これと共伴するような遺物が、特には、見当たらないので、遺跡の年代は他の遺物、中心をなす大量の消費財によって導き出すのが妥当であるように思われる。したがって、補足資料で図化した土鍋・羽釜の編年作業上の位置付けが問題になろう。

東伯耆地域の中世土器・陶磁器類の編年観を先人の業績に学ぶと、土鍋は、八峠分類の中世Ⅲ期（13世紀前半から14世紀初頭）の範疇に属すように見える。但し、門田橋遺跡の状況を踏まえると、中森ほかが指摘するように（中森ほか2022）、受け口状口縁の瓦質土鍋は、因幡だけでなく、東伯耆でも主体を占めるのではないと思われる。また、量的に目につく羽釜に関していえば、概ね12世紀後半から出現し、伯耆では、体部が直線的に外傾し、口縁部に続くものが主流であるが、因幡では、体部が丸みをもち、口縁が内湾するタイプで占められる違いがあると指摘されてきたが、上述したようにこの遺跡では双方が出土している。東伯耆の土器形式の傾向は因幡に近いものが感じられる。

また、山陰では最も研究が進展した土師器の碗・皿類についても、おおむね13世紀代の遺物として差し支えないとの見解であろうことが、発表された論文から看取されよう。（中森ほか2022）

鳥取県湯梨浜町（旧東郷町）の門田橋遺跡からは、溝に囲まれ、屋内に井戸を取り込んだ、作業小屋を想起させる建物が検出され、周辺に堆積していた貝層には銅銭が混入していた。土錘の出土から漁労活動の営みは言うまでもないが、それだけではなく、なお、検討すべき点も多いように思われる。

いずれにしても、中心的な遺物が概ね13世紀の時期を盛期と示しており、「伯耆国河村郡東郷庄之図」という荘園時代の稀な絵図を遺した東郷池周辺地域の歴史的要因を実証的にあとづけるには、山本の言うように得難い基本資料であろう。

謝辞

今回、資料の閲覧等で島根県埋蔵文化財調査センター及び島根県古代文化センターに便を図っていただきました。また、守岡正司・熱田貴保・小原貴樹・中野秋鹿各氏からは資料提供をいただき、廣江耕史・中森祥両氏には、遺物の考察で指導を受けた。なお、最後になりましたが。補足資料の実測図のトレースを始め、本稿掲載の全般にわたり益田市教育委員会文化振興課佐伯昌俊氏の協力を得ました。記して感謝します。

註

- (1) 門田橋遺跡に関する記録は、現在、島根県埋蔵文化財調査センターが保管し、島根県古代文化センターが閲覧事務を担当している、山本清考古資料の、No.1927から1954の中に含まれている資料である。山本清先生から、昭和60年頃自宅に呼ばれ、自分の手では公に成しえないので、しかるべきところに、この遺跡の概要を発表してもらえないかとの依頼を受け、ようやく今になって、ほとんど先生の準備された概要報告のままの形で紹介するものである。勉強不足で、参考になる注釈がつけられなかったことをお詫びしたいと思う。なお、「」記載した章から始まる文書については山本清先生の概要報告の原文のままとなっている。また、[図版]は[写真]と記載し、複数枚ある場合は枝番号を付与した。
- (2) 門田橋遺跡の出土品は、平成16(2002)年の市町村合併の引継ぎの際に、公民館に展示されていた数点以外は、行方が判然としない。従って、今回の検討には、山本先生の作業の成果や図版に全面的に依拠した。
- (3) 出雲市教育委員会1996『上長浜貝塚』
- (4) 山本先生は、京都帝国大学の梅原末治教授について考古学を学び、山陰における考古学研究の基礎を確立される以前は、文献史学により中世史も学んでおられたので、当然と言えば当然のことである。
- (5) 例えば、伊藤久嗣「元興寺極楽坊出土の羽釜形土器」(伊藤1968)や稲垣晋也「法隆寺出土資料による土釜の編年」(稲垣1962)など。
- (6) 最も早い開元通宝の初鑄年は621年、最も新しい永楽通宝は1408年。
- (7) 村上勇1979「山陰の中世のやきものに関する覚え書」『松江考古』第2号、松江考古学談話会
久保穰二郎1980「因幡地方における中世初頭の陶器について」『郷土と科学』第26巻1号
- (8) 島根県内では、古墳時代以来の須恵器窯が多く所在する松江市大井窯跡群に隣接する朝酌町の別所遺跡で、亀山焼に類似した鍋。鉢・釜・甕が出土し、それらは焼け損じたような灰色の軟質のもので、二次焼成を受けたものも多く見られ、生産場の可能性があると指摘されている。
- (9) 島根県埋蔵文化財調査センターで保管される山本清考古資料のNo.1955・1956の記載による。
- (10) 東郷湖は旧湖面の西側半分が陸地化している。

引用・参考文献

- 出雲市教育委員会1996『上長浜貝塚』
磯貝富士夫2002『中世の農業と気候—水田二毛作の展開—』吉川弘文館
伊藤創2015「山陰における東播系須恵器」『中註近世土器の基礎研究26』日本中世土器研究会
伊藤久嗣1968「元興寺極楽坊出土の羽釜形土器」『元興寺仏教民俗資料研究所年俵』第・
井上寛司1991「中世」『大社町史上巻』大社町
稲垣晋也1962「法隆寺出土資料による土器の編年」『大和文化研究』第7巻7号
大西正巳・近藤正史1961『砂丘のおいたち』大明堂
加藤裕一2007「因幡・伯耆の調理具」『山陰における中世の調理具』第5回山陰中世土器検討会資料
久保穰二郎1981「身干山・金崎両遺跡の出土遺物について」『鳥取県立博物館研究報告』第18号
坂井秀弥2002「越後の道・町・村—中世から近世にへ」『中世の風景を読む—4 日本海交通の展開』新人物往来社
柴田龍司1991「中世城館の画期」『中世の城と考古学』新人物往来社
島根県古代文化センター2015『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』
島根県立古代出雲歴史博物館2015『入り海の記憶 知られざる出雲の面影』
日本中世土器研究会2023『新版 概説中世の土器・陶磁器』
東京大学出版会2024「伯耆国東郷荘地下中分絵図写」『日本荘園絵図集釈文編四』会
中森 翔・西尾克己・廣江耕史・守岡正司2022「山陰」『新版概説中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会
西田友広2021『荘園のしくみと暮らし』松江市ふるさと文庫26、松江市歴史まちづくり部史料調査課
服部英雄2003『武士と荘園支配』日本史リブレット24山川出版社

- 村上 勇2009「バリア海退が中世地域社会に与えた影響について」『西国城館論集Ⅰ』中国・四国地区城館調査検討会
- 八峠 興1998「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究』XⅢ、日本中世土器研究会
- 八峠 興2003「中世須恵器の流通—鳥取を中心に—」『第3回山陰中世土器検討会資料集 中世須恵器の生産と流通』山陰中世土器検討会
- 八峠 興2004「山陰の中世土器に関する覚描」『中近世土器の基礎研究』XVⅢ、日本中世土器研究会
- 八峠 興2021「山ノ下遺跡の中世土器について」『鳥取県倉吉市山ノ下遺跡Ⅱ平ノ前遺跡Ⅱ』鳥取県教育文化財団
- 山本信夫「2010貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」『貿易陶磁研究No30』、日本貿易陶磁研究会
- 湯梨浜町教育委員会2023『鳥取県東伯郡湯梨浜町 令和2・3年度町内遺跡発掘調査報告書』湯梨浜町文化財報告書第5集

【付記】

山本先生が参考にされたと考えられる、稲垣（1962）、伊藤（1968）論文は、羽釜形土器の出現や変遷を考える上で、重要なものであることは、古代・中世土器研究を主導してきた橋本久和氏が研究史の中で言及してきたとおりであり（橋本1992『中世土器研究序論』）、当然注視しなくてはならない課題であったが、山陰のそうした器種変遷の研究の状況と、畿内の研究成果との確たる関係性について、筆者の理解が及ばなかったため今回は言及することを避けた。